

# 植木画伯とご長老

杉区 内藤 實（本町六丁目出身）

「そろそろ一周忌ですね。」

そこから妙高が見えますが、幻覚症状で頭の中が妙高一色だったのでしょうか。病室の窓辺の点滴のバックが朝日でキラキラ光るのを見て、「妙高」「妙高」と言っておられましたね。

いもり池では遺作展が開かれています。とても嬉しいことに、あなたの「妙高」を、たくさんの人達が観賞していますよ」

「中国は美しいよ。絵になる」

地下鉄で一枚の中国旅行のツアー募集のチラシを眺めていたら、声を掛けられた。

三年前、それが画伯との出会いだった。赤坂見附で乗り換えても一緒。バスも一緒。

「山本惣治を知っているとは、高田の人か」

「ハイ」

驚いたことに家も近い。

だが、たった二年間の交流だった。

——しかし、思い出は尽きない。

初仕事は、個展の手伝いと采寿のお祝い。

銀座・上越市・妙高高原にお伴した。

色々な経験、大勢の方達にも紹介された。

絵一筋、我儘だが人情味豊か、笑いあり。

九十五歳が寿命目標。精神年齢若い。

ところが、その後二人は癌の宣告を夫々の病院で宣告された。

彼は信せず、医者を数と決めつけた。が、

当方は途方にくれ、医師に救いを求めた。

彼曰く。

「君は若いのだから急ぐことはない。頑張れ」

病人が病人を励ました。

彼はそれから自分史に取り組む。

今度はワープロのお手伝い。当方も娘に

教わりながらの深夜作業。

『文芸たかだ』の吉越泰雄さんの全面協力で作成。

病床で痛みを抑えて、小冊子をシッカと抱きしめた。

小冊子。「八十路を妙高とともに」

「年賀状に添えて友人、知人に配りたい。挨拶状を書いてくれ」

「ハイ、わかりました」

残念ながら、年は越せなかった。

寿命の目標には間のある九十歳で。

通夜で、野口春雄さんから、

「君はよく尽くしたね」

と声をかけられた。当たり前のことをしただけと思いつつも、有難い言葉だった。

その野口さん、流石に常磐ハイワイアンセ

ンターの生みの親でもあり、九十歳にして

お元気。

星野清二郎さんも九十歳を過ぎて随想稿

筆、旧海軍仲間や部下の世話で多忙。「佐

藤策次先生を偲ぶ」は面白い。渋谷で一杯

やって、もう一年が経つ。

宮崎八百二郎さんのステッキ姿を近く

公園で拝見したのも一年前。

身近かに接した故人と、Jネット会員の

三長老に触れた拙文で失礼しました。

ご長老及び会員の皆さんのご多幸をお祈

りします。



サロンでの内藤氏さん